

海外調査報告

台湾農紀行

外間 数男

Kazuo HOKAMA: Essays of the agriculture in Taiwan.

はじめに

台湾は那覇から約600km. 与那国島からは100km余りに位置する。気候は亜熱帯から熱帯、高地では温帯、亜寒帯まで多様な風土を示す。人口は2,323万人(2012年)。その大部分は福建省からの移住者である。

福建省は閩、古くは越と呼ばれ、琉球王国の進貢船の係留地であり、進貢貿易の拠点であった。また600年余り前には閩人三十六姓が沖縄に渡り、その後の琉球王国で重要な役割を果たした。沖縄と台湾は食や伝統行事など文化に共通する点が多い。

黒潮はフィリピン東海上で誕生し、台湾東岸をとおり東シナ海に入り、九州、四国の沿岸部をかすめる。黒潮は南からの文化をもたらず流れとして、柳田國男は「海上の道」を想定した。また黒潮文化や黒潮文化圏など黒潮にまつわる文化論も多い。黒潮の文化に及ぼす影響は軽視できないものである。

台湾は黒潮の中継地にあり、沖縄の農耕文化、基層文化に何らかの影響を与えているかもしれない。その痕跡を探したいと台湾を訪問したのである。本編は2012年3月の訪台を基本とした。

1. 五穀廟

都心から少し離れたところに神農街(路)がある。その近くには五穀王が祀られている。五穀王は五穀先帝、神農大帝、葉王大帝とも称され、農耕を教え、葉草を用いて治療したことが

ら、農業の神、葉の神として崇められている。

宜蘭駅から西に伸びる閑散とした光復路を進むと中山路と交わる。そこから左に折れ、しばらく行くと神農路につながる。その交差点に入って直ぐに宜蘭五穀廟がある。廟の前は神農路である。台湾の廟にしては中規模程度。奥に向かう通路沿いの椅子には老人が何をすることなく座っている。奥の壇上には五穀王が鎮座し、その前で若い女性が長い線香を両手に祈願中である。静かな廟は願いごとしか聞こえない。

宜蘭の五穀廟は旧宜蘭城の南門前にある。現在城壁、南門はなく、旧城南路となっている。廟は200年以上の歴史を持ち、古くから信仰をみつめてきた。毎年旧暦の4月26日には五穀豊饒を願う祭りが行われる。宜蘭平野は昔からの米どころ。農業の神は地域住民にとって不可欠な存在である。

台南駅から西に20分ほど進むと古い住宅地に突き当たる。都心から離れた静かな住宅地の一角に神農街がある。その端に葉王廟がある(図1)。葉王は五穀王、神農大帝と同じ。ここでは葉王として祀られている。

葉王廟は豪華絢爛としているが、内部はくすみ、こじんまりとしたものである。祭壇のそばでは老人が新聞を読んでいる。入っても気がつかない。写真を撮り、眺めていても関心は示さない。廟の前は神農街。古い住宅の裏通りで、木造の建物は昔の日本である。路地を歩くと懐かしくなってくる。



図1. 葉王廟 (台南市神農街).

神農街は、台南の中心地民生緑園から約1 km離れたところにある。都心の直ぐそばにありながら、昔ながらの住宅地を形成している。神農街を出ると直ぐに近代的なビル群が路上を占有する。台南は近代的ビルと古い伝統家屋の混在する街である。

台北市にある大龍峒保安宮は保生大帝を祀る廟である。廟はMRT圓山駅から西に10分ほど歩いたところ。圓山駅は廟を模倣し、駅前を赤い提灯が参拝者を迎える。赤提灯は街路を彩り、華やかさを醸し出す。

保安宮は大きな廟である。前殿、大殿、後殿、奥殿の目の字型の廟である。奥殿は4階建てとなっている。医の神・保生大帝は大殿に祀られている。後殿には神農大帝(図2)を中心として幾つかの神々が祀られている。祭壇の前は線香を両手にした参詣者で溢れ、煙でかすみがちになる。神農大帝は農業と医療の神。その前の祭壇は、祈願で訪れる人の波が絶えないものである。

台湾には数千の寺廟がある。廟は神々を祀る宗教施設である。廟は多神合祀となる場合が多く、地域全体で維持管理されている。廟内は出



図2. 五穀王・神農大帝 (台北市大龍峒保安宮).

入り自由であり、夏の昼下がり涼をもとめ、長椅子で昼寝し、老人たちが集い、子供達の遊び場にもなる。地域のコミュニティーセンターである。

2. 農業博物館

台湾大学はMRT公館駅を出て数分に位置する。大学正門を入ると10mを越すヤシ並木が続く。春の青空の下で南国風情を醸し出す。農業陳列館は正門から直ぐのところにある。陳列館は3階建ての農業博物館(図3)。1階は喫茶店兼ロビー。2階が展示室。



図3. 台湾大学農業陳列館.

1階には陳列館の歴史、展示内容の変遷がパネル展示されている。展示館は1964年に設置された。1999年までは農業の生産分野を展示の主

体にしたが、2000年から科学技術となり、2005年からは生態分野に変わってきたと記されている。

訪問時には、林学分野の教育展が開かれたばかりであった。室に入ると、直ぐに案内担当の学生が声をかける。その中の女子学生が片言の日本語で展示内容を説明してくれる(図4)。展示は写真、パネルを駆使し、地球温暖化に対する森林の役割など生態に関する分野が多い。中国語で書かれたパネルは説明が不要なほどわかりやすいものである。



図4. 台湾大学農業陳列館。
陳列館の内部と案内の女子学生。

出口近くに、教授職員の発表論文数の推移がパネル展示されている。研究論文や国際誌への掲載論文数は2000年代に入って急増しているのがわかる。それ以前に比べ圧倒的な増加である。その理由は聞きもらしてしまったが、評価制度の変更があったかもしれない。

展示館の1階は喫茶店・休憩室で自由に休むことができる。その片隅には大学の刊行物・雑誌類が棚に立てられている。「台湾農学会報」「農業與経済」「台湾林業」「漁業経済」「農友」などが目に留まる。持ち出し禁止と注意書きされているが、自由に手にとることができる。大学を気軽に訪問し、飲み物を飲みながら大学の

研究状況などを知ることができるのである。

展示館の向いには農産物展示中心がある。展示というより、大学で出版された図書や開発された商品などを販売する売店である。お茶などの農産加工品、菓子類、本、洗面具など多様な商品が売られている。ラベルには台湾大学と明記され、商品開発と販売が一体となっているのである。写真を撮っていると、店員がダメだと手を振りながら走り寄ってくる。

また農業陳列館から少し離れたところに赤レンガの建物がある。旧帝大時代の図書館であったらしい。その2階に人類学博物館がある。展示室の前には民族展示處と看板があがり、台湾原住民の伝統工芸品が展示されている。室内には数名が展示品に見入り、担当者から説明を受けている。展示の説明者は学生ではない。専門の担当者である。そのうちの一人が片言の日本語で説明する。生業にかかる展示はないが、竹製の手鋤がパイワン族の衣類とともに展示されている。竹製など見たことがない。実用的か聞いてもわからない。おそらく祭り用であろう。

正門から伸びるヤシ並木の東側は農学分野のエリア。その一角に小さな田がある。田の周囲に柵もなく、通り沿いから気軽に覗くことができる。コンクリート枠のミニ田は20枚余り。ミニ田には台湾の野生稻 *Oryza rufipogon* が植えられている。その株下を見ると刈り跡が見え、そばからヒコバエが伸び、青々としているのである。また野生稻と並んで青茎、紫茎、紫葉の田芋、エンサイが植えられている。しかしラベルがないので出自はわからない。

そこから歩いて数分に大学農場がある。農場はフェンスが張られ中に入ることにはできない。しかし外から様子を見ることができる。水田は整地したばかりで何も無い。これから植えるのであろう。その水田の側に木造平屋の建物があ

る。そばの説明書きには、磯永吉博士の写真とともに、旧高等農林学校の作業室と書かれている(図5)。磯博士は蓬来米の父。この地で台湾蓬来米が誕生したと記されている。木造建物は1925年の旧台北帝大の前身、高等農林学校の作業場である。博士はこの建物で水稻の選抜に日夜従事したのであろう。



図5. 旧台北帝国大学時代からの作業室(台湾大学)。
台北市指定文化財。

磯博士は1911年に旧東北帝国大学(札幌市)を卒業すると、直ぐに台湾に渡り、台湾総統府農事試験場、台北帝国大学教授を歴任し、戦後も台湾に留まり水稻の普及に尽力したという。博士の育成した台中65号は沖縄の水稻にも画期的な生産をもたらし、沖縄とも密接なつながりがある。博士が仕事をした作業室は、今でも健在であり、稲穂を眺める博士の姿がみえるようである。作業室は2009年に台北市の文化遺跡に指定された。

農場横の池には水鳥が羽を休め、そばの樹陰では老人、婦人たちが話に夢中である。春の日射しは強くないが、太陽の下を歩くと汗だくになる。木々の茂る農学部売店前は、中高年の婦人たちが賑やかにアイスクリームを食べている。構内を行き交う学生とともに中高年の顔は違和感なく溶け込んでいる。大学は、地域住民

にとっても身近な存在であり、観光スポットにもなっている。学生と地域住民が大学を共有しているようである。

3. 糖業博物館

高雄市橋頭糖廠駅にある糖業博物館は、台湾糖業会社の工場跡である(図6)。巨大な工場そのものが博物館として保存されている。構内にあった実験室、機械庫、農器具庫などが展示室として活かされ、サトウキビの運搬に使われた滑車・鉄道も屋外展示されている。台湾糖業を振り返ることのできるスポットである。



図6. 糖業博物館(高雄市)。
台湾製糖会社の橋頭糖廠跡。

旧工廠の正門から入るとヤシ並木がつづく。その突き当たりに糖業博物館はある。ヤシ並木を歩いていると演歌がながれてきた。カラオケ機材を持ち出し日本演歌に興じる中高年が休憩所の前に陣取っているのである。演歌は台湾でも庶民の娯楽。花蓮、台東の廟でもボリューム一杯がなり立てていた。台湾南部ではよく目にする光景である。

糖業博物館に入ると、直ぐに新渡戸稲造の銅像がある。台湾糖業の父と説明書きされている。新渡戸博士は台湾総統府の後藤新平民政長官に請われて1901年(明34)に渡台し、技師に任命

される。同年5月殖産課長なって直ぐの9月に「糖業改良意見書」を児玉源太郎総督に提出する。これにより台湾糖業の基本方針が策定され、1902年(明35)から製糖業への補助、種苗、肥料、灌漑排水、開墾などへの補助事業が本格化する。この時から台湾におけるサトウキビ生産は急増した。この時代、沖縄では土地整理法が公布(明32)され、明治36年に完成し、宮古、八重山では人頭税の廃止(明36)、サトウキビ栽培制限が撤廃されたところである。

文物館内には初期の糖度計、化学天秤、測量機器、化学分析機材、顕微鏡などが展示されている。日本統治時代のものであろう。館を出るとサトウキビでつくられた迷路がある。5mはありそうなサトウキビが真っすぐに伸び、木枠で支えられているが、支えなしでも立ちそうな茎の太さがある。折れや曲がりなどは無い。品種、植付けなど説明書きがないのは残念であったが、迷路遊びであれば不要かもしれない。

工場に向かっていくと、右手にも展示室があり、製糖流程解説館と表示されている。内部は薄暗い。目が慣れてくるとサトウキビの品種改良、栽培法、栽培環境、製糖法など古い写真や資料が浮かび上がってくる。展示物の劣化防止で暗くしているのであろう。説明内容は詳しくないが、古い台湾の糖業事情を知ることができる。その暗い中で一際明るいのは、台湾製糖会社が製糖業を縮小し、多角経営に乗り出す経緯と事業内容を説明したパネルである。砂糖、畜産、精密農業、生物科学、量販、給油所、レジャーなど8分野への事業展開を詳細に説明している。流程解説館をあとに工場に入る。工場は停止しているが、巨大な機械は今にも動きそうな気配である。参観者用の歩道橋のそばには、製糖工程の詳細な説明板が設置されている。製糖工場の内部は学生時代に見ただけで、こんなに巨大

なものであったかと驚くばかりである。

工場のそばには子供の遊び場がある。子供連れの若い夫婦が子供と戯れ、高齢者が眺めている。そこからしばらく歩くと大きな展示棟がみえる。展示棟は糖業歴史館。工場運転に必要な発電機や結晶塔など製糖の一連の工程がわかるようにミニ器材が並べられている。その棟の前には巨大なハーベスターや大型機械が屋外展示され、近くにサトウキビの運搬用の気車が朽ち始めてはいるが、静かにたたずんでいる。

高雄市橋頭の糖業博物館は入場料がない。週末は観光客で溢れ、MRT工廠駅から博物館までは出店も並ぶ。博物館の目玉は、特性アイスクリームなど冷凍菓子類と観光列車であるが、展示そのものも負けてはいない。博物館は過去の遺物の保存庫などと暗いイメージがつきまとうが、橋頭はレジャースポットであり、高齢者が集う場所である。

糖業博物館は台南市にもある。台南駅から数km南の東区にあり、タクシーで150元程度。この地は日本統治時代の旧総督府糖業試験所、戦後は台湾製糖会社の糖業研究所のあったところである。糖業の縮小に伴い研究所の一部が博物館として利用され、台北にあった台湾製糖会社の本社機能もここに移ってきた。

博物館の担当者は秘書課の張軒豪と博物館担当の謝登尊(図7)。展示棟には、旧総督府糖業試験所時代の圃場の利用図(昭8、9年)、試験成績書(昭6)(図8)、報告書(昭5)、施設台帳、辞令書、履歴書、備品保存台帳などが展示されている。また総督府糖業試験所の開所式、サトウキビの収穫、搬出、製糖、気車による運搬風景や当時使用された農具(鋏、手鋏、収穫鎌)、顕微鏡などが展示され、日本統治時代の研究所の様子がわかる。またサトウキビの品種、病害虫標本などが展示され、沖縄にも馴



図7. 糖業博物館（台南市）。

サトウキビ運搬用荷車の車輪の前で担当の謝（右）、張（左）さん。



図8. 日本統治時代の糖業試験所の調査ノート・昭和6年6月30日の調査成績。

台南市にある台湾製糖会社の糖業博物館。

染みのあるNco310, F系統などがアルコール漬けされている。

屋外には、サトウキビの運搬に使用された気車、巡回車、大型トラクターが展示され、日本統治時代の建物、古木も健在である。戦後60年以上もすぎたにかかわらず、日本統治時代の建物、試験研究機器が大事に保存されているのには驚くばかりである。

高雄市の橋頭糖廠にある糖業博物館は製糖工程を主体とし、糖業縮小後の多角経営を説くものであったが、台南市のそれはサトウキビ生産に主眼を置いている。いずれも設置場所の前身

を反映していることから当然かもしれない。台湾製糖会社が糖業を縮小しても、基幹産業であった糖業の軌跡を博物館に託したのは、糖業に対する熱い思いがあったのであろう。

4. 土地改革陳列館

台湾土地改革陳列館は桃園駅から復興路を西に進み、中山路を約1km歩いたところにある。表通りの表札は行政院農業委員会農業区域教学中心。門を入れて向いの建物は国際土地政策研究訓練中心となっている。その横に目を移すと朱色の派手な建物があり、土地改革陳列館と玄関上に書かれている（図9）。



図9. 台湾土地改革陳列館（桃園市）。

管理事務所は陳列館の隣の建物。日本語を少し話す女性が案内するという。施錠された展示館に入ると、正面に牛に犁をひかせて田を起す像が構えている。それを中心として壁面にはパネル、写真が展示されている。パネルには「三七五減租」の文字が躍っている。

「三七五減租」は1949年の地租改正。この政策により、これまで収穫量の50~70%であった小作料が37.5%に軽減されたのである。さらに1951年には、「三七五減租条令」を制定し、賃借契約期間は6年、終了後の更新は小作農が優先権をもち、成文契約にするとされた。また

1951年の「公有農地払下げ」により日本人が所有していた農地18万haが農民に移り、1953年の「耕者有其田」の制定で、水田3ha、畑6haを越える農地の政府買い上げと農民売却により自作農が増加した。これらの政策により、台湾の農業生産は飛躍的に増加し、食料供給、物価、賃金は安定化し、工業発展の基礎が築かれたという。

台湾における土地改革の第一段階は「三七五減租」である。この政策で小作農は自作農に転換する契機となり、台湾工業化の礎が築かれていった。陳列館はその様子を教えてくれる。桃園県は客家の多く住むところ。台湾北部の農業の中心地であり、早くから生産性の向上に力を入れ、台湾一の模範農村であった。そこに土地改革の博物館があることもうなずけるものである。

5. 伝統農具の探訪

台湾には博物館が多い。都市には設備の整った博物館があり、地方には小さな博物館が街中にある。博物館は地域文化の保存庫である。展示を通して地域の様子を知ることができる。中国大陆から移住してきた漢人、それ以前の原住民の使用した生産用具を見ることで生業、特に農業の様子を知ることができる。台湾では先住民を原住民とすることが憲法で謳われている。日本統治時代は高砂族、生蕃と呼ばれていた。

国立台湾博物館は台北市の二二八公園内にある。日本統治時代の1915年に第4代台湾総督児玉源太郎、民政長官後藤新平の偉功を称えて開設された博物館である。ギリシア風建物の玄関を入ると、ドーム型屋根の下は2階まで吹き抜けになっている。展示場は2階。階段を上ると、直ぐに気車、電車の模型、写真が飾られている。そこを抜けると台湾原住民の衣装、生活用具、

発掘品などの展示コーナーに入る。

平埔族の祖霊祭、泰雅族の狩猟用具、弓と矢、槍、布農族の農耕祭、粟、サトイモ、トウモロコシ、排湾族の木器、スプーン、特殊木具、ルカイ族の大型甕、ツオウ族の高床住宅（集会場）、笛、楽器、アミ族の農具など原住民の生活が展示されている。

この博物館で唯一の農耕具はアミ族の手鋤である。12cm位の鉄の鋤先に長さ約60cmの柄を着け、片手で耕す農具である。布農族のパネルは粟畑の開墾から収穫まで一連の作業を図示している。館内の展示は1時間もあれば見終わる。博物館の玄関横には、石臼、水入れ、豚の餌入れなど石でつくられた生活用具が野外展示されている。沖縄の石つくりを彷彿させる。

順益台湾原住民博物館は台北市の郊外にある。林清富氏が20年以上の歳月をかけて集めたコレクション。台湾原住民の風俗文化を幅広く紹介した私設である。博物館はMRT淡水線士林駅で下車し、バスで20分ほど。故宮博物院の前にある。

博物館の1階は原住民の分布、居住地の紹介、その奥の階段を上ると原住民の生活と道具の展示室になる。農業コーナーには、焼畑、開墾、牛耕、田植え、粟収穫の古い写真とともに木製の臼と杵、農耕具などが現物展示されている。大鎌、小型の鉄製鋤（図10）、掘棒、小刀、小



図10. 大鎌、鉄製鋤（順益台湾原住民博物館）。鋤とラベルには記載されている。

型鎌、穂摘刀などの農耕具があり、掘棒以外はすべて鉄製である。大鎌はよく見るかたちであるが、小型の鋤は見たことがない。鋤に柄を付け牛に引かせたのであろうか。人力で使うには掘棒とかわらないものである。守口大根の収穫に使うヤリに似ている。掘棒は、直径4cmほどの木の枝を長さ約50cmに切り、先を尖らせたものである。掘棒の先は鋭くない(図11)。図



図11. 右下から時計回りに掘棒、小型刀、鎌、穂摘刀(順益台湾原住民博物館)。

い土を耕すには難しいかもしれないが、石礫の多い焼畑や軟らかい畑の耕起には威力を発するのであろう。収穫用具コーナーには、綺麗に掘られた臼、唐箕がある。箕は沖縄のパーキそのものであり、小刀、小型鎌、穂摘ナイフは粗雑な作りであるが素朴で、農家の息吹が伝わってくる。いずれも沖縄にもありそうなものである。

国立自然科学博物館は台中駅から車で約15分の距離。博物館は生命科学、人類文化、地球環境の3分野からなる。人類文化では、中国の伝統医学、中国農業、台湾原住民の生活の様子が展示されている。ルカイ族の山地住居と焼畑、ヤミ族の豚の飼育、原住民の集落と粟の穂刈、陶器、石斧、石鋤の作成、粟の粉碎の様子などが蠟人形で再現されている。石斧、石鋤、石庖丁、石刀、石槍はまとめて、わかりやすい展

示であるが、生活の匂いは感じられない(図12)。



図12. 耕作用具(台中市の国立自然科学博物館)。

台東市の郊外にある国立台湾史前文化博物館は、雑木林と荒地に囲まれている。この地は先史時代の卑南族の集落があったところ。卑南遺跡は日本統治時代に鳥居龍蔵氏が石柱を記録し、鹿野忠雄氏の考古学的調査、1945年の金関丈夫、国分直一氏の発掘調査で住居跡と土器が発見された。しかし1980年の鉄道建設に伴う再発掘まで埋もれたままであった。その後10年に及ぶ発掘調査の結果、台湾先史時代の集落、生活を知る貴重な遺跡群であるとして保存の機運が高まり、博物館建設につながった。

卑南遺跡は、台湾新石器時代中晩期の遺跡である。遺跡からは石棺、陶器、玉装飾品が多数発掘されている。卑南遺跡の民は狩猟と焼畑を営んでいたようである。焼畑では粟などを栽培し、石斧、石鋤、石刀、石鎌、石杵などが用いられ、石鋸などで猪、鹿、魚を採っていたようである。博物館には、精巧に磨かれた石器が並び、石棺や陶器を作成する蠟人形が展示されている。石棺埋葬は沖縄でもみられ、北九州、韓国に共通する文化である。同遺跡は台湾東海岸の先史文化のみでなく、南島民族文化との関連性も指摘されている。

屏東県、屏東市の東24kmに山地文化園があ

る。文化園は行政院原住民委員会カルチャーパーク管理局が管理する原住民カルチャーパークである。園内には台湾原住民9族の伝統的な家屋が散在する。原住民の使用した家屋を忠実に復元されたものであり、材料や造りを直に比較してみることができる。平地に住むアミ族はカヤを巧みに利用し、ツォウ族は竹、パイワン族は石版が利用され、ヤミ族は掘り込み式の住居など地域特性が旨く利用されている。

文化園には、生業にかかわる道具の展示はないが、民族植物景観エリアに段畑がつくられ、粟、サトイモが栽培されている。粟は鳥害防止ネットで覆われ、穂刈された粟が路面に干されている。またタラカン族の伝統家屋の裏側にも、段畑がありサトイモとアカザなど数種作物が植えられている(図13)。段畑は石礫が多く、平鋏では刃がたたない。堀棒など先の細いものでなければ難しい。高地の民である原住民の生業は粟など焼畑での栽培である。小規模な段畑から往時の様子を垣間見ることができる。



図13. アカザの一種(屏東県三地門山地文化園)。

公園の正門横には原住民文物陳列館がある。館内に入ると直ぐに日本統治時代に起こった原住民の蜂起事件が写真入りで説明されている。霧社事件の様子が克明に記され、重苦しい雰囲気がかかっている。生業にかかわるものはないが、出口

に掘棒または槍を模したアートがあるだけである。

6. 朝市

台湾の街中には市場があり、回りを露店が囲み生鮮食品の調達場所になっている。台北市の都心にある城中市場は日本統治時代からの市場。統治前の台北は城壁で囲まれていた。周囲数キロもある。城へは東西南北にある門から出入りした。日本人は城内に住んでいたが、統治後に城壁は取り壊され、西門の外側に拡大していった。現在の繁華街西門町である。

城中市場は西門寄りにある(図14)。市場は、車1台がやっと通れる程であり、路の両サイドに野菜、果物、衣料品、乾物、食べ物屋などが軒を並べている。建物は黒光りするほど古い。市場入口に桑の実を売っている老人が無表情で立っている。桑の実が沖縄のものより数倍大きく、黒く熟している。型崩れはない。新鮮であるのであろう。食べたいが、そのまま食べるわけにもいかず、写真だけで老人に礼をいう。老人はすでにビニール袋を手にして幾ら買うのかとの表情で待っていたのである。



図14. 城中市場(台北市)。

城中市場は小さく、数分で通り抜ける。朝8時の市場は、八百屋、肉屋は準備万端整えてい

るが、他は開店準備に追われているところである。市場を抜けると向かい側にも市場がある。小さい路地の両サイドに店舗が並び、路地は薄暗く、閉店中も多い。食べ物屋は揚げ物に余念がない。

台北市のMRT木柵線の南京東路駅から北に少し歩くと長春路にでる。長春路を左に進むとビルの1階に長春市場がある。この市場は15年前にも見ているが、その後の移り変わりを知りたいと訪ねたのである。市場に入ると、通路に沿って肉の塊がぶら下がっている。その前には店主が陣取り、大きな庖丁で肉を切っている(図15)。その光景はかつての沖縄の肉屋そのものである。市場内には、肉を切る音が静かに響くだけである。朝の早い週末の市場はこれからが活動開始である。



図15. 朝春市場(台北市).

長春市場を出ると、直ぐのわき道に人が溢れ、騒然とした雰囲気伝わってくる。小さな路地には野菜、果物、揚げ物、衣料品、食べ物屋が並び、その前を買い物客が行き交い喧騒としている。以前来たときには、カゴに入った鶏が道端に置かれ、その場で処分されていたが、今は見られない。

MRT淡水線の雙蓮駅から地上に出ると、直ぐに屋台を行き交う人々の群れに遭遇する。雙

蓮朝市は駅の前(図16)。路の両サイドに出店が陣取り、バイクが人の波をかき分け通りすぎていく。車など通れない。朝市の開かれる通りは100mほどであるが、売られる品物は多様である。野菜、果物、衣料品、靴、カバンなどあらゆるものが扱われている。路端に陣取り、その前に品物を並べる光景も以前の沖縄である。老若男女、子供連れなどあらゆる人々が朝市に繰り出している。朝市は急ぐことなく、人の波に合わせてゆったりと進むのが無難である。それを破るとぶつかってしまう。



図16. 雙蓮朝市(台北市).

蓮朝市は庶民の食料調達場所である。しかし最近、多様な品物を扱うようになり、スーパーマーケット的機能も併せもつようになってきた。

7. マンゴーの郷・玉井

玉井を訪ねるのは3度目。前2回は9月のマンゴー最盛期であった(図17)。3月の玉井市場は何を扱っているのであろう。玉井に行くには、台南駅前から興南客運「玉井」行きバスで終点下車。所要約1時間。町に入る手前に巨大なマンゴーがある(図18)。玉井のバスセンターは町に入って直ぐにあり、その近くに青果集積場がある。この地は日本統治期の大正から昭和の初めに、台湾原住民による抗日事件があっ



図17. マンゴーの集荷場（台南市玉井1999年9月）。



図18. 巨大なマンゴー（台南市玉井）。

たところとして知られている。

市場は大型のテントが目印。3月の市場にマンゴーは見られない。テントで覆われた市場は以前の喧騒がない。マンゴーのシーズンではないからであろう。マンゴーは袋入り乾燥チップしかない。パパヤ、バナナ、パイナップルが市を占め、ウコン、サツマイモが並べられている。マンゴーの産地が多角化する前兆なのであろうか。隣の市場では衣料品、野菜、肉が売られ、市場の出入り口には野菜の露天商が陣取っている。

玉井は丘陵地にできた街。周囲の山には満開のマンゴーが銅色に輝いている。街はマンゴー

の木々に囲まれ、静かにたたずみ、路行く人は高齢者が多い。バスセンターでバス待ちしているのも中高年の婦人、老人達である。昼下がり、の街に高齢者が多いのは当然かもしれない。働き盛りは夕方しか街に帰らない。旧玉井郷も今は台南市の玉井区。広域合併で郷は台南から消失した。都心の台南にバスで1時間余り、1日25便もある玉井は通勤圏に組み込まれかねないものである。マンゴーの郷の生き残りは、これからが正念場である。

おわりに

台湾に住む人々の原籍は福建省（閩南）が多い。1926年の統計では83%、1968年で74%を閩南系が占める。次いで広東省の客家系が13%である。中国大陸から移住した漢人は、生活、習慣、宗教などすべてを出身地に準じた。移住者は郷土から守護神をたずさえ、廟を建設した。廟は地縁、血縁の守り神として重要な役割を果たしてきた。

台湾の廟は祖先の霊を祀り、神々の祠である。生活に密着し、いつでも参拝できる身近な存在である。仏教の仏壇の役割を果たしているともいわれる。廟には神々が合祀される。台北の大龍峒保安宮には保生大帝を主殿に祀り、神農大帝、媽祖など13の神々が祀られている。祖先を崇拝し、死者を尊ぶことなど沖縄に共通する文化である。

国立台湾大学は旧台北帝国大学が前身。構内には当時の赤レンガ建物が幾つも現存する。正門から入って右が農学分野のエリア。ヤシ並木を挟んで向かいに農業陳列館がある。大学は観光スポットでもあり、構内には中高年の団体、個人の姿が絶えない。大学が開かれたものであることが理解できる。陳列館は、大学が身近な存在であることを一層強くするものである。

台湾糖業公司是、1946に日本統治時代の製糖会社が合併して設立されたものである。当時の台湾における最大の企業であった。現在でも台湾最大の地主であり、台湾高鉄の大株主でもある。1990年代から多角経営に乗り出し、製糖業は縮小した。高雄の製糖工場、台南の糖業研究所は博物館にかわり、製糖業の痕跡を留めている。

沖縄の製糖業も低迷している。沖縄本島に数社あった製糖工場は、現在2社2工場である。閉鎖された工場跡地には製糖の痕跡がなくなりつつある。製糖業は、王国時代から現在に至るまで沖縄の地場産業として他に追従を許さなかった。今往時の隆盛はないが、その果たした役割は極めて大きい。その痕跡が失われていくのは寂しいものである。

桃園市にある農業改革陳列館は訪れる人が少ない。日本からの訪問者は、あなたが最初と案内の若い女性という。桃園市は観光地でなく、空港から台北や地方に行く中継地にすぎない。陳列館は台湾における土地改革の歴史を知ることができる。少ない展示品から、農民の息吹が伝わってくる。

小農具は街中の金物店に行けば見られるが、手汗のしみ込んだ農具はない。直に農家を訪ねれば良いが、簡単にはいかない。博物館なら過去に使われた農具があると訪問したのである。生業に使われた道具は、わずかに展示されているだけである。しかし限られた展示品から生業の様子を垣間見ることができる。石斧、石鋤、

掘棒は、農耕文化の基層を伝えてくれる。それを体系的に展示できればと期待するものである。

朝市は露店が中心となる。常設市場を核とし、その周囲に露店が自然発生する。この形態は台湾中南部の街中でよく見られるが、台北市では失われつつある。台北市の雙蓮朝市は線路沿いにでき、城中市場は常設が殆どを占める。しかし長春市場は、横の路地で露店が賑わいを示し、今でも健在である。

台湾の露天市は変わりつつある。15年前に比べ、露店も野菜、果物から衣料品など多様な品を扱うようになってきた。また飲食店も少なくなってきた。大都市の露天市は衛生上の問題、美観から存続が難しくなりつつある。

玉井を訪ねたのは数度。春に訪ねたのは今回が初めて。マンゴーは開花期をむかえたばかりで、収穫はまだまだ先である。市場にはマンゴーの乾燥チップが並べられていた。周囲の丘陵地にはマンゴーの木々しか見えないが、市場内にはバナナ、グアバ、パイナップルなどがカゴに入れられ、ウコンが台上に広げられている。マンゴーの郷は高齢化しているが、活路をみつける意気込みが市場からは伝わってくる。

台湾は沖縄に最も近い外国である。基層文化から台湾を眺めることは、南方文化との関連、沖縄とのつながりを知る上で必要である。今回の訪台では、日常にひそむ文化を探し求めることにしたが、大雑把なものになってしまった。その穴埋めは今後の課題にしたい。